

人物のまちから 福島

はんだ・しんじ著



目次

希望の種	………	1
母親の気持ちを知る	………	5
ご縁、福島県に感謝	………	9
未来は明るい	………	13
盆栽に学ぶ人材育成	………	17
笑うお食事会	………	21

【希望の種】

現在、「福島ひまわり里親プロジェクト」《主宰NPO法人チームふくしま》に参加しています。プロジェクトは、ひまわりの種を全国に販売し、育て、花を咲かせ、採れた種を福島に持参。福島を観光していただき、魅力や人に触れ、種をまき、夏にまたひまわりを見るために二回目の観光に来る仕掛けです。県内の皆さまには全国からの種を配布させていただき、「希望」のひまわりとして咲かせることで全国と福島の絆を紡ぎます。

発足のきっかけは三・一一。東日本大震災は県内の雇用に大きな影響を与えました。観光光が落ち込む↓土産品売上減少…。それはもともと二本松市の知的障害者通所施設「和（な



ごみ)さんで行われていましたが、震災でまったく仕事がなくなっ
てしまいました。この状況から復興を進めるためには、皆様からの
寄付という「対策」から、具体的に仕事を創(つく)る「問題解決」
が必要と考え、仲間とプロジェクトを立ち上げました。種のバック
詰めなど、一連の仕事が生まれました。

そんな折、通所している四〇代の男性が駆け寄ってきて「お仕事、
ありがとうございます！」と言って下さったこと
がありました。震災で仕事が増減し「働くことが
できない」とショックを受けていたところに、全
国の皆さまのおかげで意味のある仕事をするこ
とができたそうです。働くことは、人に喜んでい
ただくこと―。「働く喜び」をいつも「和」の皆さん
に教えていただいています。



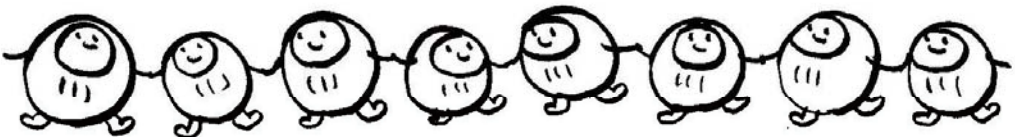
プロジェクトは三年目を迎え全国で累計十万人以上が参加。来年
度、中学校公民教科書副読本でも二冊の掲載が決定。学校参加数は
八百六十五校。修学旅行回復のきっかけの種にしたいと考えていま
す。県内では、飯坂温泉吉川屋さんを中心に県旅連青年部の皆さま、
福島、二本松(全小中学校)、田村市などの自治体、双葉地区仮設住
宅など一万六千か所以上で咲き誇りました。
先日はプロジェクトをテーマに柏屋さんが
ロールケーキグランプリにて受賞もされまし
た。参加者の方は早くも来夏に思いをはせ、
県内のひまわりの咲く温泉地や観光地を巡る
コースを楽しみにされているようです。

こんな物語も。三重県松阪市の中部中と福
島市の福島四中の交流が生まれました。三重

松阪祇園祭に福島の子どもたちが招かれ、飯坂のけんか祭りに三重の子どもたちが訪れるなど、文化も含めて理解を深め合っていました。先日、福島で行われた五度目の交流の中で生まれた考えの変化について発表がありました。福島のある生徒は「義を見てせざるは勇なきなり」と座右の銘を持ったと発表。三重の生徒は福島の現状と福島の大人の背中を知ったことで、三重で同じような震災があった時に自分の手で助けられるようにと自衛隊の学校に入ることを決意したと明かしました。交流が、確実に子どもたちの価値観を変えています。

この交流は、福島四中の先生方や保護者の思いがあったからこそできたものです。福島の地が、子どもたちの希望を創り、学び合う場になりました。福島は希望の力の剣になりますね。感謝。

(第四回民報サロン 二〇一三年十一月十二日 掲載)

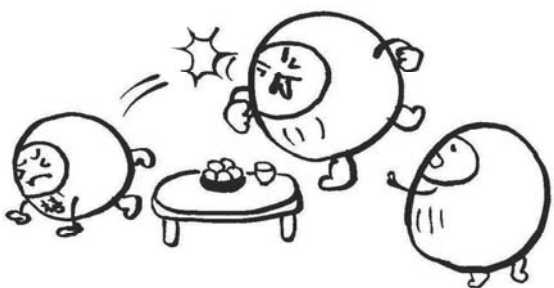


【母親の気持ちを知る】

十二月十七日。東京帝国ホテルにて、《福島ひまわり里親プロジェクト》の活動が、パナソニック教育財団主催・文部科学省後援の「子どもたちの『ごころを育む活動』」で、全国で4位となる奨励賞をいただきました。この賞は、未来を担う子どもたちの『ごころを育む活動』に貢献、努力している団体の活動を表彰するものです。全国の参加学校八百六十五校を中心とした生徒さん、その周りの大人たちの一つ一つの活動の結果のようで、胸が感謝でいっぱいになりました。この日は、偶然にも私にとっては誕生日。《両親に産んでくれてありがとう、育ててくださってありがとうと感謝を伝える大切な日》でなおさら感謝の思いでいっぱいでした。そんな両親とのやりとりをご紹介させていただきます。

震災があつてまだ間もない四月、大分県で「陽なた家」という飲食店をやっている永松茂久さんに知覧の特攻平和会館に連れて行ってもらいました。その時は正直、そんなに感じるものはありませんでした。あの時代にこんな若者がいたんだなという程度でした。

その後、広島の実家に寄つたんです。親に、「明日、福島に帰るから」と言ったら、「福島に帰るなんてばかなことはやめろ」と言われ、初めて両親と大げんかをしました。僕は広島出身なので、家族が福島にいるわけでもなく、特に福島にいる理由はないんです。だから、親からしたら理解できないんですね。でも、僕にはたくさん仲間が福島にいるので、「福島に帰れなくなったら困る」と思って、



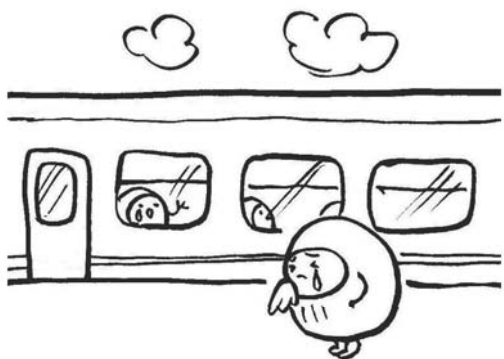
翌朝早く、両親がまだ寝ている間に、だまって広島駅に向かいました。その時、母親ってすごいなと思いました。こっそり家を抜け出して広島駅に行ったのに、新幹線に乗って外を見たら母がいたんです。「なんでお母さんいるんだろう」「連れ戻されるのかな?」と思ったんですけど、母は「いってらっしゃい」と言って、笑顔で送ってくれました。

「ああ、お母さんは分かってくれたんだな」と思って、改めてもう一回見たら、目を真っ赤にして、ポロポロポロポロ涙を流しているんです。あの姿を見た時、「なんかものすごい親不孝をしているのではないか」と思いました。そして、知覧で聞いた話を思い出したんです。

「お国のために行ってきたさい」と言いながらも、実際わが子が飛び立つ時には、「行かないで」と思いながら見送るお母さん。そのお

母さんと自分の母親がすごくダブったんです。福島で意味あることをしないとイケないなど、「震災があったからこそ、こんなに良くなった」と、笑って話せる日を迎えるために、今自分にできる範囲でコツコツとやっています。

両親に現況をお伝えするこの場のきっかけをいただきました民報社さま、いつも励ましてくださる弊社の採用と教育研究所のスタッフその家族の皆さん、NPO法人チームふくしまの皆さま、先輩方、見たよくと病室から励ましてくださる二本杉先生、佐久間先生本当にありがとうございます。感謝。



(第六回民報サロン 二〇一三年十二月二十四日 掲載)

【ご縁、福島県に感謝】

広島県出身の私は、ひよんなご縁で福島に在住させていただき七年目になります。

大学卒業後、入社した商社で最初の赴任地は金沢。そこで、仕事の中に事故に遭い、一時は車いす生活も覚悟するほどの大けがを負いました。それをきっかけに長い入院生活に入りましたが、私の人生を変えてくれた一人の小学五年生の男の子と出会います。たまたま、ホールであった時に「今日、僕の誕生日なんだ」と言われ、とっさに「何が欲しいの」と聞くと、「僕の夢は大人になりたい」と答えました。その当時の私には彼が何を伝えたかったのか理解できませんでした。その後リハビリの先生に教えていただき、病でその子は私が入院中に他界されたことを聞きました。その瞬間、私自身の価値観が大き

く変わりました。「私たち大人は彼の夢の中で生かされているんだ」
恥ずかしい話ですが、入院するまでは正直、考えたこともありません
でした。

彼があこがれた「大人」。自分は生きた大人として何ができるだろ
うか？と葛藤する毎日でした。そこでたまたまある一枚のCDに出
会います。その講師の方が話されるには、人
生を変える四つの鉄板ルールがあるそうで
す。「返事は0.2秒」「頼まれごとは試され
事」「相手の予測を上回る」「何のために」と
いうお話を、まるで落語のように話されてい
ました。これを素直に実行し続けていくと、
気付いたら、この地に来ることになりました。

当時の自分は、車いすでもできる仕事は何



だろうと考え、相談業務である精神保健福祉士の資格を取得しまし
た。福島県庁で募集していた「若者自立相談員」を知り転職しました。
縁もない福島県でのお仕事でした。正直腰が引けていましたが、た
またまお話をいただきました。まさに「返事は0.2秒」でした。
広島出身の私を受け入れてもらえるのか正直不安でいっぱいでした
が、県庁の皆さんが本当に温かく、染みる優しさに、契約期間が終
了し広島に戻るか大変悩みましたが気付いたら、福島県の魅力に取
りつかれ、どうやったら福島県に住むことができるのだろうと考え
る毎日でした。

時間はあったので毎日、何をしていたかと
いうと「手品」でした。手品には全く興味は
ありませんでしたが、これも先輩に「半田さん、
最近、返事は0.2秒らしいね。では、「ミニユ



ニケーションマジックというのがあるから。ようは、手品なんだけどやってみてごらん」と言われたのがきっかけです。そのまま「イエス」と、喜んで行動させていただきました。今があります。気付いたらあちこちの老人施設や病院にボランティアで訪問させていただきました。そのご縁で現在、「採用と教育研究所」を設立し、「あり方」に特化した企業・団体研修や講演のお仕事をさせていただいています。

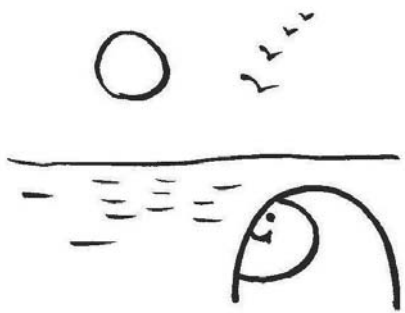
人に喜んでいただく生き方を、少年やたくさんの方々に教えていただき今があるなど今更ながらに感じています。ご縁に、日常の当たり前に、一緒に働いて下さる仲間、両親に、福島県という地に感謝する毎日です。

(第一回民報サロン 二〇一三年九月十二日 掲載)

【「未来」は明るい】

社員教育（人財育成）の会社で働かせていただいていますので、業務では社会人の方とのご縁をいただくことが多いのですが、時には学生・生徒向けの講演の機会もいただきます。子どもたちですと年間一万人程度の方にご縁をいただきます。

そこで顕著に感じるがあります。福島県は他県と比較して将来、能力のみが高い「人財」ではなく、思いやりにあふれる能力もある「人物」を輩出する街になるかもしれないということです。その根拠は、東日本大震災以降に出会った子どもたちの言葉や考え方の変化にあります。そんな未来を感じる彼らの言葉を紹介させていただきます。



二〇一一年十一月、郡山市のあさか開成高で学ぶ双葉高サテライ
ト校の生徒さんが当時学校で開催できなかった文化祭を市内で催し
た時の感想です。

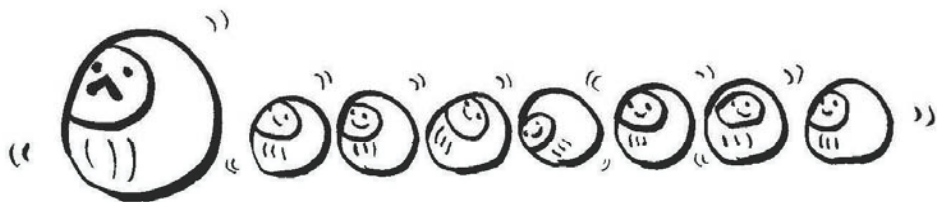
・双葉高一年（野球部）「震災があつて、校舎も使えなくなつて、
最初は不安だったけど、今は楽しい学校生活がおくれています。今
日の文化祭もそうですが、僕たちは今、たくさん皆さんに支えら
れてこうして学校で学ぶことができます。その恩返しは自分た
ちがしっかりと学び、次の社会に貢献していくことだと思ひます。
ありがとうございます」

「なんのために」学ぶのか。「試験でいい点数をとるため」から「世
のため、人のために生かすため」に変化したようです。きっと彼が
大人になると、働くことも「世のため、人のため」になるのだらう
と想像できます。

もちろん、彼一人が素晴らしいのではなく、熱心に生徒
をサポートしていらつしやる先生の日々の積み重ねがある
と推察されます。双葉高の校長先生と先生方は熱心な方ば
かりでした。

二〇一一年四月、一人の生徒とご縁をいただきました。

・福島商高一年（男子）「震災があつて座右の銘が変わ
りました。それまではちよつとカッコいい四字熟語を座右
の銘にしていました。でも震災があつて、自分の座右の銘
が『いつでも人が喜ぶ判断を』というものに変わりました。
自分は避難所にいました。その時に周りの大人たちが、見
ず知らずの人たちに本当に親切にしていました。その背中
を見て、そういう大人になりたいと思ひ、まずは形から入
らうと思ひ座右の銘を変えました」



この話を聞いて、子どもたちは我々大人が想像しているよりもはるかに大人の背中をしつかりと見ているのだと実感しました。

震災があったからこそ、子どもたちが地域や未来をより一層、考えるようになりました。これから大切になるのは、子どもたちが地域に誇りを持てるかどうかでしょう。それはわれわれ大人にかかっているのだと、彼らから学びました。

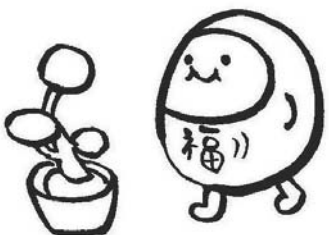
岩瀬農高の佐久間辰一先生に先日、教えていただいた言葉で締めたいと思います。「人は人のために生きてこそ人である」「喜べば喜びごとが 喜んで 喜びつれて 喜びに来る」この言葉に感動しました。こんな先生や大人に囲まれる生徒は幸せですね。感謝。

(第二回民報サロン 二〇一三年一〇月二日 掲載)

【盆栽に学ぶ人材育成】

私が、ほっとする瞬間の一つが「盆栽鑑賞」です。これは福島市在庭坂にある「ぼんさいやあべ」さんに魅せられたから。初代倉吉さんから二代目賢一さん、三代目大樹さんへとその枝と 생각이 継承されています。

ぼんさいやあべの盆栽のほとんどは福島市の吾妻山を自生地に持つ五葉松を、種から育てたもの。庭に並ぶ盆栽を見た人たちはそのことを知ると一様に驚きの表情を見せます。そのどれもが、吾妻山の自然の中に置かれていても違和感の無い「自分らしい盆栽」です。あべの盆栽は形にはこだわりません。枝と枝の間に空間を空け、その木の幹や枝の形を見せることで、そこに「美」を



見せる。空間有美という考えを持つ、自然らしい盆栽がそこにはあります。

「自然らしい」。その言葉だけを見れば、その木が伸びるまで放任しているだけにも思えます。しかし、盆の上にただ放置したのでは、当然、盆栽はできません。しつくと、接木という方法で手をかけて作られていきます。

「しつけ」とは、針金を巻いて、幹や枝の矯正を行うこと。このしつけは幼いころ、芽が出て四、五年のうちにしつけをするのが大切といえます。この時、ただしつけをするのではなく、その松の数十年後、数百年後の姿を考え、特徴、良しあしを見極めて、その木が一番良い形を考えてしつけます。

接木は、良い根の形や幹があるのに葉など一部分が盆栽の基本から外れた良くない素材の時に行われる方法です。幹、枝、葉、全て

が申し分のない一流の素材ではなく、どれか一つが悪ければそれは二流といえる素材です。しかし、盆栽作家はこれを一流に仕上げていきます。不要な葉を持つ枝を切り落とし、一流の葉を持つ木を接木する。

一瞬でくつつくわけもなく、五年程度の歳月をかけてじっくりとその枝をなじませていきます。良い面を見極めて残し、悪い面には手をかけて補うことで、その木の良さを生かしていきます。

厳しく見えるこれらの方法は、その子が最も力強く美しく映える姿にしようとする思いから。誰にでも同じしつけをするのではなく、その子の数年後、数十年後をイメージし、導くように手をかけていきます。



自然らしさの感覚には、山々での徹底的な観察が伴います。山の葉一枚一枚に至るまで一日中眺め、写真や記憶にとどめます。そして、盆栽が育つ畑に帰り、草取りなどの地道な積み重ねをしながら、それぞれの木に目をかけ、その木らしい木の形をイメージしていく。感覚は、日々の積み重ねで磨かれていきます。人育てがいきなりではないのと同様で積み重ねの中で人を知り、育てる相手のことを知ることが大切で、人財育成と全く同じです。

万人に共通する自然への感動を小さな盆の上で表現する仕事の裏側には、盆栽作家それぞれの生きざまや思いも見えてきます。今や、世界中から見学に訪れる感動の盆栽屋から、いつも人育てに通じる道を教えていただいています。福島県には魅力がいっぱいですね。

(第三回民報サロン 二〇一三年一〇月二十二日 掲載)

【笑うお食事会】

今年も残りわずかとなりました。毎年十二月二十九日に「笑うお食事会」を開き、一年を締めくくっています。児童養護施設「アイリス学園」の子どもと地元の大人が交流する企画で、今年で5年目になります。子どもたちからわれわれ大人が多くのことを学ぶ機会にもなっています。

施設には様々な家庭の事情を抱えた子どもが入所しています。この子たちが一番寂しい思いをするのが年末だそうです。ボランティアが減少し、施設の中でも一時帰宅できる子、できない子と分かれてしまうからです。

東日本大震災の時の子どもたちの作文の一部を紹介させていただきます。「震災で初めてお母さんから心配の連絡がきたのでうれし

かった」、「初めて大人と一緒に寝ることができうれしかった」（安全確保のため一定期間、全員一緒に寝たため）。働かれている職員の皆さんは子どもたちにとって先生であり、親であります。職員の皆さんは、自分の家族と接するのと同じように、子どもたちの家族として奮闘されています。傷ついた子ども们的ことを一生懸命に考え、支援している皆さんにはいつも頭が下がるばかりです。人のために生きる姿に、輝きを感じずにはいられません。



「笑うお食事会」の参加者には、ボランティア活動ですが参加料をいただきます。参加者自身と子どもの食事代、アミューズメント店の入場料です。子どもと一日一緒に遊び、食事をするのがボランティア参加の条件。参加者同士の名刺交換や写真撮影など、ビジネス

スのメリットになる関係づくり、PRは禁止で、大人側には全くメリットのないイベントです。それでも毎年、多くの参加があります。福島の大人たちは志があり、思いやりのある方が多いとしみじみ感じます。

イベントでは、子どもと大人がペアになって遊びと食事を楽しみます。元気いっぱい子どもたちと、一緒に体を動かす大人たち。終わるころにはすっかり仲良くなっています。食事は「しゃぶしゃぶ温野菜横塚店」さんにいつもお世話になります。普段は店のスタッフが交代わりを運ぶのですが、この日は子どもたちが自分で取りに行きます。大人は箸の使い方など食事のマナーも教え、「食事」という日常を一緒に体感します。食事の後片付けを子どもたちが行い、終了。子どもたちは帰りのバスに乗り込みます。大人たちはバスの前に一列に並び、手を振り、子どもたちもまた、身を乗り出すように大人たちへ手を振

福島民報新聞 民報サロン掲載記事



第3回 2013.10.24 第2回 2013.10.02 第1回 2013.09.12



第6回 2013.12.24 第5回 2013.12.03 第4回 2013.11.13

り返します。

イベントが終わると、子どもたちから手紙が届きます。「一緒にスポーツをしました。楽しかったです」「遊んでくれてありがとうございます」など感想が書かれた、どの手紙にも「また来年も楽しみにしています」「また、会いたいです」と、大人たちとの再会を願う言葉がつづられています

みんなが幸せになり、このイベントを開催する必要がなくなるのが一番望ましいのでしょうか…。私自身は何よりも、「物よりも心の継続が大切」ということを子どもたちや参加者のみなさん、職員の皆さんから学ばせて頂いています。感謝。

(第五回民報サロン 二〇一三年十二月三日 掲載)



《感謝》今回心よく、登場していただきありがとうございます。

金沢大学病院で出会った少年、中村文昭様、双葉高校様、
福島商業高校様、福島第四中学校様、佐久間辰一先生、
福島県立岩瀬農業高校様、ぼんさいやあべ様、椎木様、
飯坂温泉吉川屋様、笑うお食事会の皆様、
知的障害者通所施設「和(なごみ)」の皆様、県旅連青年部の皆様、福島、
二本松（全小中学校）、田村市などの自治体、双葉地区仮設住宅の皆様、
柏屋様、三重県松阪市立中部中学校様、
児童養護施設アイリス学園様、鈴木厚志様、
しゃぶしゃぶ温野菜郡山横塚店様、「陽なた家」永松茂久様、
NPO法人チームふくしまの仲間たち、里親の皆様、
福島の皆様、三本杉先生、

今回、きっかけを下さった吉田様、
あたたかく、編集、×切サポートしてくださった、
福島民報新聞社文化部の皆様ありがとうございます。
なにより新聞記事の基本を支えて下さり、何度も読みや検討をして
くれたり、たたき台を創ってくれた、採用と共育メンバーの清野さん、
岡崎さん、阿部さん、藤井さん
そしてなにより広島のお父さん、お母さん
ありがとうございます。



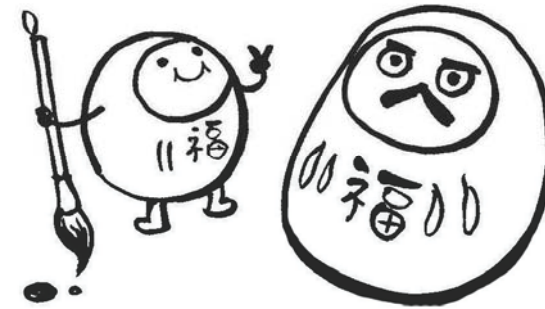
プロフィール

氏名 **はんだ しんじ**

所属 採用と教育研究所

略歴 福島県福島市在住。大学卒業後、東証一部上場エネルギー
商社入社、人事部に所属。勤務中の事故で、一時は車椅子生活を覚
悟するほどの大けがを負う。長い入院生活での「価値観の変化」を
きっかけとし、福島県庁商工労働部雇用対策グループへ入庁。若者
自立相談員として、日本初の県行政の試みであった福島県行政によ
る「ニート相談業務」、就職サポートセンターでは特別職業相談員と
して携わる。任務期間終了後、現在の採用と教育研究所を設立。福
島県内を中心に《良い会社を創る為》に特化した事業を展開する。

会社の事業として、毎年十二月二十九日に福島市内の児童養護施設
の子どもたちと地域の大人たちを繋ぐ「日本一不親切な有料ボラン
ティア」（笑うお食事会）を開催。本年は、六年目に突入。
福島を同情的街から尊敬の街にするべく、福島ひまわり里親プロジェ
クトの理事長を務め、希望のタネを子どもたちにひまわりで、大人
たちにはリーダーシップの街を創るためにいい会社づくりの種まき
中。



採用と教育研究所

〒960-8055

福島県福島市野田町6-7-8-B-103

電話：024-529-5153

FAX：024-529-5794

info@saiyoutokyouiku.com

《採用と教育研究所》

<http://www.saiyoutokyouiku.com>

《福島ひまわり里親プロジェクト》

<http://www.sunflower-fukushima.com/>

●発行 平成26年3月11日 第2版

